

---

# つよきす 愛羅武勇伝

神無鶴人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つよきす 愛羅武勇伝

### 【ZPDF】

Z0890Y

### 【作者名】

神無鶴人

### 【あらすじ】

もしもレオが幼少の頃に乙女さんに対してもベンジを誓っていたら……。

そんな考えと某SSの影響で書き始めたつよきすの一次小説です。この小説はつよきすの再構成＆主人公、対馬レオの設定改変ものです。

本作のレオはかなり強化していますので、こんなレオは嫌だと思つ方は早めにリターンをお勧めします。

本作には様々な他作品の技が多数登場します（主に格ゲーとキン肉

マン、男塾等)。シシ「//所満載ですがよろしくお願ひします。

## プロローグ 獅子をも凌駕する獅子（レオ）（前書き）

この小説は基本的に主人公のレオの視点と三人称で構成します（一部例外あり）。

## プロローグ 獅子をも凌駕する獅子（レオ）

人生の分岐点は？と聞かれれば俺は間違いなく即座に三つ思いつくだろう。

一つ目…アレはガキの頃、当時ガキ大将的な近所の男子に喧嘩で勝った俺は好い気になつて従姉に挑戦し……完膚なきまでに叩きのめされた。

そして馬にされた挙句……「くち！」たえするなコンジョーナシ！くやしかつたらわたしにかつてみろ！」と言われた。

上等だこの野郎……何年掛けてでも強くなつて泣かしてやる…！

と、まあこんな子供染みた復讐心から格闘技を始めた訳だが、いざ始めてみるとコレがなかなか面白い。

特に自分が以前より強くなつたと実感した時は何とも言えない快感だつたりする。

次に二つ目…あれは中学の頃…………当時の友人だった近衛素奈緒が同じクラスの不真面目な馬鹿共相手にいざこぎを起こし、俺はそれに首を突っ込んで……その結果俺は周囲から「ハツスル君」なんて不名誉な仇名を貰い、逆上した馬鹿共が俺の知らない所で近衛に手を出し、それにブチ切れた俺はそいつ等全員入院する程の大怪我を負わせ、長い事世話になつた道場から破門された。

あの馬鹿共をぶちのめした事に全く後悔なんてしていないが一つだけ分かつた事があるとすれば、テンションに流されると碌な事にならないって事ぐらいだな。  
コレばかりは今でも嫌な思い出だ。

そして最後に、中学卒業を機に足を踏み入れたこの世界…………。

『ああ、本日のメインイベント、ミドル級のタイトルマッチだあ！』

『！』

それは…………地下闘技場だ。

『赤コーンナー、勝てば新チャンピオン誕生、ココまでなかなかの勢いで勝ち星を稼いできました、美男子ムエタイファイター、半田紗武巣選手！！』

観客に大袈裟にアピールする半田、見た目通りキザな野郎だ……。『青コーンナー、現ミドル級チャンピオンにしてプラスナックルトーナメント優勝経験を持つ若き獅子、対馬レオ選手！！』

「レオ―――！負けんじやねえぞ――！そんなキザ野郎、速攻でぶつ瀆せ――！」

「そうだそうだ――俺はそういう顔の奴が本気でムカつく――」

「そりゃお前の私怨だろ」

観戦している幼馴染達の声援と叫び声の喚き声に冷静なツッコミを入れる我が親友。

とりあえず声援に応える様に軽く手を振る。

『さあ、いよいよゴングです！！』

司会の声の直後、ゴングによる金属音が鳴り響いた。

「ハツ！セイ！でああっ――！」

ゴングと同時に仕掛けてくる半田。拳とエルボーの連携が俺に襲い掛かる。

『おおつと早くも半田選手得意のコンビネーションだ――！』

『よつ、ほつ、とつ……』

得意のフットワークで全て回避。うん、大変よく出来ました俺。

『ええい！ちょこまかと――私の拳で沈みたまえ――！』

業を煮やして突撃戦法に切り替えてきた。だが……。

「ラア……」

カウンター気味に拳を繰り出し、相手の鼻つ柱に叩き込む。「がつ！？」

効果あり！半田の奴は鼻血を出して仰け反った。

「おのれえつ！！私の美しい顔によくも！……！」

うわ……リアルに聞くと本氣でイタイな、その台詞。

「喰らえ！必殺、ジャガーキック！……」

一回点ジャンプしながらの踵落としを繰り出す半田。

「馬鹿が……」

スピードも勢いも今一つ、それじゃ俺には勝てない。

相手の足を受け止め、がら空きになつた腹に渾身の力を込めた拳を叩き込む。

「うぐええつ！……」

豪快な音とうなり声とともに半田はマットに沈む。

勝ち星を稼いできた割に大した事無いな、この手の連中はアレだ。新人潰して勝ち上がってきたって奴……たまにいるんだよな。

レフューリーが近づいて様子を見る。普通ならココでカウントを取るんだが……その必要は無いようだ。

「勝者、対馬レオ！」

試合終了を表す「ゴング」が鳴り響き、観客席から歓声が聞こえてくる。

そんな中俺は静かに半田に近づいた。

「次ぎ戦<sup>や</sup>るときはキッチリ腕磨いて来い、新人潰しなんてセコイ真似せずにな」

俺の言葉に半田は力無く頷いた。

「さてと……」

俺は観客からの歓声に応えるように右腕を高々と上空に突き上げた。



## 対馬レオの日常　登校風景

NO SIDE

対馬レオは健康優良児である。

道場で空手を習っていた頃の習慣で、日頃から筋トレを欠かさず事無く続け、筋力は落ちる事無く維持され、レオの肉体は丈夫そのものである。

それに加え、寝る前は常に20分ほどのストレッチを毎日欠かさずやっているため、睡眠は基本的に熟睡。

故にレオは怪我以外で医者の世話になる事はほとんど無い。しかし、そんな彼も意外と寝起きは普通だったりする。決して遅くも早くも無い。

人間には睡眠欲という三大欲求の一つがあるし、何よりレオは早寝などしない。

そんな彼を目覚めさせる役割を持つのは目覚まし時計、そして……。「おい、起きろ坊主、起きないなら俺のドギツイのぶち込むぜ」

「ん……ああ、分かった、起きる」

目をこすりながらレオは起き上がる。

レオを起こしたその赤髪長身の男の名は伊達スバル……レオの幼馴染の一人で親友である。

某自動車修理工のナイスガイみたいな台詞を口にしているが基本的にノーマルなので前作の凸ハゲと違つて安心して友人関係を結べる男である。

「先行つてるぜ、いつも通りカニ起こして来い」

「了解」

それだけ言つてレオは服を着替え、一度家を出て隣の家に向かつ。

「お姉さん、おはようございます」

家の前に居る女性マダムに声を掛ける。

びつかりびつ見ても『お姉さん』なんて歳じゃないが『レは社交辞令である。『レを言わないと後が怖いのだ。

「レオちゃん、いつもすまないねえ、あんな出涸らしのためこいつもこつも……よかつたら嫁にもらってくれない、アレ?」

「俺にいきなり『舞空術を教えてくれ』なんて言ひ娘はちょっと…」

「そうよねえ、私が男でも絶対嫌だもん」

そんないつも通りの会話をしてレオは2階へ上がる。

扉を開けるとベッドに寝そべる少女が目に映る。

典型的な幼児体型、栗色のショートヘア、恥も外聞もなく丸見えのパンツ。

コイツが出涸らしこと蟹沢きぬ、通称カニである。

蟹沢家の長女であり優秀な兄と違ひどうにも頭の出来がイマイチで両親から出涸らし扱いされ、ほとんど放任されている(とこつても別に家族仲が険悪という訳では無い)。

ちなみに彼女は自分の下の名前がお気に召さないらしく、下の名前で呼ばれるとキレて暴れまくるので取り扱いには要注意である。

「ニニニ…」

「お~い起きり出涸らし、いつまで馬鹿面晒してる気だ?」

「……やっぱ……ボクって可愛いよねー」

実に器用な寝言。レオは時々彼女の馬鹿さはある意味凄いと思つてしまつ。

取り敢えずそろそろ起ひれないと自分まで遅刻してしまつのでわいつと起こす事にする。

いつも通りカニの頭を掴んで軽く少しづつ力を加えていく。レオの得意技の一つ、アイアンクロールである。

「いででででででででで…!!」

「よう、起きたか」

丁度カニの意識がハツキリし始めたところで手を離す。

「んーー、おはよつ……」

先程の痛みも忘れて再び寝ぼけ眼になるカ一。鈍いと言つか國太いと言うか……。

「じゃあ、20分後、一度寝したら置いてくからな」「んーー、分かつた…………」

多分分かつていない…………。

しかしレオはそんな事気にしない、何故なら泣きを見るのはカ二であつて自分じゃないのだから。

その後、スバルがおせっかいで用意してくれた朝食を食べて支度を済ませて家を出る。

カ二は来て……ない。どの道予想していた事である。

「レ」によつて至る結果 レオはカ二を置いていく。

一見冷たい選択に見えるがレオはそんな事気にしない、何故なら泣きを見るのはカ二であつて自分じゃないのだから。大事な事なので2回言いました。

## レオSIDE

やはり朝のこの時間は通学路であるドブ坂通りは非常に静かだ。どの店もまだ開店前なので仕方ないと言えば仕方ないが……。

「ちょっと待てやああああ——————！」

静けさをぶつ壊すチビが一人、カ二だ。

「おお、やつと来たか？」

「来たか？じゃねえよ！—ボクを忘れんじゃねえよ！—余りにも大事な存在だろうが！—」

「お前が遅刻しないかで言えば俺は遅刻しない方を取るんだな」「そこはボクを選べ！！」

無茶言つた。

## Z O S H D E

5分後

「よお、レオ」

ジュー<sup>ジュー</sup>スを買<sup>さめ</sup>いに行つたカニを待つていると現れた猿面の眼鏡男、鮫冰真一。

格好良いのは苗字だけ、他は全く駄目。彼の事を説明する言葉があるとすれば

『ヘタレ』

これ以外に無いだろ？

「何か今遙か天空の誰かに悪口言われた気分なんですけど」「気にするな（いつもの事だろ）」

「そんな事よりさあ、聞いてくれよ俺昨日ケイコちゃんヒートの約束を……」

言つておくが「レはギャルゲーの話である。

「オメハのギャルゲー談義なんて聞きたかねえよ」

いつの間にか戻ってきたカニが盛大な毒舌を炸裂させる。「うつせえよチビーお前にケイコちゃんの良さが分かつてたまるか！？」

実に下らない事で言い争つ二人。

## レオ SIDE

「ん？」

騒ぐ二人の馬鹿を無視して先に進もうとした時、俺の六感がこっちに迫ってくる殺氣を拾い取った。

「つ！」

乗っていたMTBマウンテンバイクを飛び立つように乗り捨て、背後から鋭い蹴撃が繰り出される。

「つ……」

即座に反応し、ブリッジのように体を反らして回避。

「チツ！」

襲撃者は一瞬舌打ちして肘鉄を繰り出してくるが……。

「フンッ！」

「グ……やるわね……」「

腕を付かんで捻り上げ、関節を極める。

「相変わらず朝っぱらから随分な挨拶だね、姫」

「あら、コレくらい対馬君には挨拶代わりでしょ？」

襲撃者の名は霧夜エリカきりや、通称『姫』。

俺の通う学園、竜鳴館の生徒会長にして世界に名立たる霧夜グループの令嬢。

頭脳明晰、運動神経抜群、容姿端麗にして高いカリスマ性を持ち、人の上に立つ器を持つた女だ。

ただしその性格は傲岸不遜で傍若無人。味方も多いりや敵も多く、竜鳴館には親姫派と反姫派の一大勢力があるほどだ。

故にその姫と言うあだ名は尊敬と皮肉両方の意味がある。

彼女とは半年程前からこんな風に物騒な挨拶を交わす様になつたのだがその説明はまた別の機会に……。

んで、そんなこんなでようやく校門にたどり着いたわけだが。

「…………」  
何故か日本刀ボンを持つていてる風紀委員の前を通り登校。  
しかし、最近妙にあの風紀委員から視線を感じるんだよな。  
どうかで見たことあるような気がするけど…………誰だっけ？

おまけ フカヒレ、男の涙

カニとの下らない言い争いを終えたフカヒレはレオとエリカの（自称）スキンシップをじつと見つめていた。

「畜生、レオの野郎……あんなに姫に障りやがって…………悔しく

なんかないぞ」

「本心は？」

「悔しいです！」

## 対馬レオの日常 学園生活（前書き）

どーも、神無鶴人です。

ここ数日の間学校のパソコンが使えず、ストック作成に励んでいました。

おかげストックが結構溜まり、暫くは連日投稿で行きます。

## 対馬レオの日常 学園生活

### レオSIDE

現在竜鳴館は朝礼中、姫の演説が終わり、艦長のありがたいお葉の時間に入る。ココで生徒達は全員緊張した面持ちになる。今この場で居眠りでもしている奴がいるとすれば、脳に異常があるか自殺志願者のどちらかだ。

「男子は男氣を！女子は女氣を！磨き、青春を謳歌せよ！竜鳴館館長、橘 平蔵！！」

マイクも使わずに響く馬鹿でかい声、その声の主こそ竜鳴館館長、橘平蔵たちばなへいさうだ。

185cmという長身と丸太のようでかくがつしりとした筋肉、右目と鼻の頭に刻みついた傷跡と長い髪を蓄えたその顔、全身から出る威圧感、まさしく豪傑そのものだ。

俺の目標としている人物である。まだ独身という点を除いて……。

「ふわあ～～～」

長つたらしい朝礼が終わり教室に戻りながら欠伸を搔く。

「でつかいあくびねー、みつともない」

「ん？姫か……」

「そんなテンション低い人は見ててうざつたいから消えて欲しいかなー」

声をかけて早々これだ……いつもの事だけど。

「はい、薔薇をあげる、香氣で目を覚ましなさい」

何処からともなく薔薇を取り出し俺に投げ渡す、いつも思つが本

当に何処から出してんだこの薔薇。

「相変わらず妙な特技をお持ちのようだ

「お嬢の嗜みよ、ポーズをとつたら薔薇ぐらい出せなきや  
解らんない……。ま、俺には無縁の話しだからどうでもいいけど。

「じゃ、こつちはチャンプの嗜みだ」

貰つた薔薇を軽く指で弾く。直後に薔薇は四散し、文字通りバラ  
バラになり、そのまま風に乗つて窓の外に飛んでいく。

「わあ、薔薇がバラバラつて奴？綺麗だけどネタは古いわね」

古い言づな、薔薇しか材料が無いんだから仕方ないだろ。

## NOSIDE

本日は学生達（一部除く）にとって憂鬱な日である。

『中間テストの結果』という鋭利な刃物で精神を抉られ、クラス中  
が阿鼻叫喚の図に早変わりである。  
さて、我らが主人公レオの結果はどう……。

古典	まあまあ
現国	無難
歴史	それなり

（我ながら何て無難な出来なんだ）

例えるなら特徴が無いのが特徴、学業のジムカスタム、それがレ  
オである

「フカヒレ、歴史で勝負だもんね  
「せめてフカヒレには負けねえべ  
「負けたら人間として終いやからなあ  
そして今この時だけはフカヒレは人気者になる。

## 馬鹿の代名詞カニ。

授業中は消しゴムのカスを集めている田舎の匂いが染み付いた立ち絵つきの脇役イガグリ（本名？知らん）カニに劣らず成績低空飛行者、褐色関西弁娘、浦賀真名。その他大勢の成績の低い者達が拳こぶつてフカヒレに非常に低レベルな戦いを挑むのである。

それに引き換え……

「エリー、また満点？勝てないなあ」

「当然でしょ、何？よつびーは1問間違え？」

姫こと霧夜エリカとその親友にしてこの委員長、佐藤良美。  
こつちは余りにもハイレベルすぎる。  
(この落差は何?)

レオはそんな事を呟いた。

## レオSIDE

結果発表と言つ名の地獄の後、昼休みに入りフカヒレをパシってパンを買いに行かせて昼飯を済ませ（ちなみに、カニの奴は先程低レベルな戦いと共に戦つた戦友の浦賀さんと浦賀さんの親友で留学生の楊豆花さんと一緒に食つた）、その後残りの授業をクリアしてようやく帰りのHRになる。

しかし……担任教師がまだ来ない。

「祈ちゃん、まだ来ないのかなあ……」

「来るの遅いよな、大方また職員室でくつちやべってるんだろうけど、現実の女はこういう所がイヤだよなー」

「その発言、フカヒレは人生終わってるね」

「よつびー、帰つていいい?」

「よつぴー言わないでよっ」

佐藤さんは基本的に姫以外によつぴーと呼ばれるのは否定的だけど、もうその呼び名が定着しているのでクラスメート殆どはおろか担任にすらよつぴーと呼ばれてしまっている。  
ま、そこら辺はもう諦めるしかない。

んで結局イガグリの奴が姫に先制を呼びに行かされ、数分かけてようやく担任が姿を現す。

「皆さん申し訳ございません、遅れてしまいましたわ」

絶対申し訳ないなんて思つて無い……。

高校教師、大江山祈。

俺達の担任で担当は英語。美人で居乳ということで男子生徒の人気は抜群。媚びた態度を取らず飘々としているので女子生徒からの人気もある。

大江山と言う苗字は地名で紛らわしいので皆は祈先生と呼んでいる。ただし教育方針はスバルタである。

「祈センセ、何してたのさ？」

「職員室でお茶をしてましたらいつの間にやら」のような時間でしたの」

「ま、お前たち若造は忍耐つてモンをしたねえからな、たまには待つてみる、と言うのもいい経験だろう、コレも教育の一環だよ」

祈先生の肩に止まるオウムが饒舌に喋る。

この鳥公の名前は『土永さん』、祈先生のペットだ。

普段は空に居るがたまにああして一緒に行動している。

ちなみに声質はかなり渋く、古臭い知識で説教するのが得意技だ。

「それでは早速HRを始めますわ、プリントを配りますので回してくださいな」

……進路希望調査か。

「いいか、お前たちはとっくに義務教育終わってんだ、進学しない者はもうすぐ世間の荒波に揉まれて生きていかなきゃいけねえ、た

まにはそのとろりみてえな脳ミソ真面目に使つて、自分の将来について考えてみる、分かつたな？ジヤリ坊どもが

「……と、土永さんが言つてますわ」

相変わらず鳥の癖に痛い所突いてきやがるぜ。

## 放課後

「どうかで遊んで帰るーっ」

カニがピヨンピヨン飛び跳ねる。元気が有り余つてゐるな。

「帰宅部の活動開始と行きますか」

フカヒレよ、帰宅部に活動なんてあるのか？

「んじや、オレは陸上部行くとすつか

「がんばれよアスリート」

スバルは陸上部期待のホープである。

「……テメエらも部活がんばれよ」

「おうよ。全身全靈をかけて帰宅してやんよ」

「帰<sup>ガ</sup>宅部には帰宅部で辛いところあるんだぜ？ 陸上部の連中にはわからねえだろうがな」

「はつ、そりやあわかりたくないがよ、一応聞いてやるよ。なんの苦労があんだ？」

「あるね。陸上部や空手部……部活の連中が一生懸命やつてゐ中、俺たちは悠々と帰宅、そして家に帰つてふと、ある考えがよぎる……俺はこのままいいのか？ 青春をダラダラ無駄にしていいのか？ いや、まだ本氣出していいだけ。俺はやればできる子つて言われてるんだからな」

「うーん、でも真面目に自分の将来を考えるとハッキリ言つて怖いぞ。とりあえず、ゲームでもして気を紛らわせよう……って、こ

んな自分に気づかないフリ……で、『じゃまに自己嫌悪するわけよ。

苦労といつより苦悩ね』

そりや苦悩じやなくて単なる逃避だ。しかも一ノート思考の。

「……ああ、そりやあツレーな。せいぜい悩んでくれよ。じゃあな

スバルは呆れ顔で踵を返した。

フカヒレを表す言葉がもう一つあった、それは『ダメ人間』だ。

「あれ？ 僕の意見ダメだった？」

「ダメ人間の国家代表だなお前は

いや、本当マジで。

「伊達君、シャイцион再見」

「伊達君、部活頑張ってやー」

「はいはー」

浦賀さんと豆花さんを始めとした女子がスバルに声を掛けていく。スバルはイケメンだから基本的に女子の人気は高いのだ。男子からは怖がら（疎ま）れているが……。

「くそっ、スバルの野郎、男子からは怖がられているクセに、女子の人気が高いんだよなあ、アウトロー気取っちゃまってさあもてない男の僻みはみつともないぞ、フカヒレよ……。

「あ、ひとつ断つておくけど、うらやましくなんかねえよ？ 本当にだよ？」

「実はうらやましいんだろ」

フカヒレはコクリとうなずいた。素直な奴だ。

「まあ、スバルは顔がいいからね。クラスN.O.」

「結局顔なんだよなあ。でも俺だって悪くないと思わない？ 眼鏡つ漢だしさ」

お前はその眼鏡がマイナス要素になってるのに何故氣付かない？いや、つけようがつけまいが変わらんけど。

「フカヒレは遠回りに言つと、ブサイクのcate'ゴリーに入ると思つよ

「……それ近道で言つとどうなるんすか？」

「言つて欲しいんなら言つけど、遠慮なく」

やめとけ、お前が遠慮無しに言つたらフカヒレは死ぬ。

「あ、やつぱやめて下さい、勘弁してください」

「まあ、黙つてればそれほどでもないんだけどじゅべるダメオーラを発散するんだよねえ君は」

「いいんだ、俺には一次元があるもん、結構いいもんだぜ」

「はい、この時点で負け決定」

「言つてる傍からコレですよこのダメ人間は……」

俺とカニの容赦ない毒舌にフカヒレは○×状態になつたのであつた。

靴箱のある玄関に到着したところで、フカヒレが突然キヨロキヨロとしきりに辺りを見回し始めた。

「何、ついに妖精見えちゃつたん？ レオと一緒に病院行くか？」

「いや、何か視線感じない？」

視線？ そう言われてみれば、確かに後ろの方から感じないことも無い、ただこれは妙な気配だ、敵意も熱意も無い無機質な気配。とりあず無視して様子を見るか。

「そりかな？ どうも誰かが俺を見ている気がするんですが」

「誰もフカヒ蓮なんか見ないよ、時間の無駄じゃん」

ばっさり切り捨ててカニは靴箱の小扉を開けた。

「いや、この鋭い視線……確かに感じる……」

「コイツの察知能力は時々俺より高くなつてしまふから怖い。

「少なくともお前に思慕の情を抱いているようなものじゃないから気にするな」

「新一です、親友にまた馬鹿にされたとです……」

再び落ち込みだすフカヒレ。喜怒哀楽の激しい男である。



## 対馬レオの日常 学園生活（後書き）

次回の更新は明日7時です。

## 対馬レオの日常 夜&一日目

### レオSIDE

俺達の生まれ育つたこの街、『松笠』。

名前の由来はこの地に固定保存されている連合艦隊の旗艦名から。人口は約45万人。東京湾入口、関東の南東部に位置する、産業、港湾、観光の都市である。

米海軍・自衛隊の基地が点在し、異国情緒溢れる街として広く全国に知られている。

街には外国人や観光客、若者が多いため、ゲーセン、カラオケ、ビリヤード、ダーツ、ボウリング、クラブ、その他諸々、興施設には事欠かない。一種の歓楽街である。

都心まで一時間足らず、比較的おしゃれなイメージで尚且つ自然が多い。非常に魅力的な街だ。

あの後ゲーセンで遊んだ俺達は家の近くで一旦別れた。

「お帰りなさい、あなた」

「ああ、ただいま」

家に入るとスバルが飯を作りながら待っていた。

いつておくが別に怪しい関係とかじゃない。

俺は料理できないというほどではないが別に得意って訳でもない。

せいぜい肉と野菜炒めたり玉子焼きを作つたり出来るぐらいだ。

逆にスバルは不良っぽい外見に似合わず家事万能。作る料理は日茶苦茶美味い。

スバルの家は対馬家の三つ隣。

スバルの父親は将来を嘱望されていた陸上選手だったのだが、事故だかケガだかで挫折、後は酒びたりの女びたり。

結果母親は家を出てスバルも父親がいる家には帰りたくないらしく、父親と同じ空気を吸うのも苦痛と本人は語っている。

そんな事情で俺の家で飯を造つて一緒に食うわけである。

大体週3～4日くらい。俺は資金と場所を提供し、スバルは食材と技術を持ち寄る。

わかりやすいギブアンドテイクな関係だ。

「今日は野菜もこんもり入った牛カルビと、ネギの味噌汁、きくらげとフキの『ごまねーズ』だ」

「最高だぜ、何でお前女に生まれなかつた?」

「フカヒレみたいな発言すんなよ」

地味に傷つくぞその言葉、……。

その後力二とフカヒレも家に来て暫く駄弁り、9時を回つた頃で家を出る支度を開始した。

「あ、そういうば今日だよね、防衛戦」

「ああ、骨のある奴だと良いんだけど」

これから行く所は俺のバイト先、地下闘技場だ。

地下闘技場……とだけ聞くと聞こえが悪いが、正確には違う。

地下にあるバー『狂犬<sup>クレイジードッグ</sup>』、そこで行われる格闘ショードだ。

ショードといつても勝負自体は真剣勝負そのもの、ファイトマネーだつて出る。

賭博もやつて無いから合法だし、ルールもプロの総合格闘技と同じだ。分かりやすく言えばハイレベルなアマチュア格闘技つて所だ。客もかなり多く、遠くから来る人間も居るほどだ。松笠の隠れた名所である。

ただしファイターの実力もピンからキリ、俺の実力は闘技場に登録しているファイターの中でもトップクラスでミドル級チャンピオンなため、互角に戦える人間は少ない。

チャンピオンクラスの実力者であれば俺と互角以上の奴はいるんだが、如何せんそんな実力者はなかなかいない。それに他のクラスのファイターとは早々戦えないし、最近はつまらない防衛戦ばかりだ。

「今回の対戦相手だけど、半田紗武巣とかいうキザ野郎だぜ、新人潰して好い気になってるって噂だ」

何処で仕入れたのかフカヒレが対戦相手の情報を教えてくる。新人潰しか…………あんまり期待できないな。

『さあ、本日のメインイベント、ミドル級のタイトルマッチだあ！』  
で、試合になつた訳だが……試合内容に関しては割愛させてもらひう。  
プロローグで語つたし…………。

NO SIDE

現在時刻午後一時ジャスト。

夜の松笠にたたずむ一人の女。

長身で鋭い目つきだが整つた顔つきに抜群のプロポーション。

「ねえ、ちょっとといいかな？」

その美貌に釣られて男が声をかけてくる。何処からどう見てもナンパだ。

「消える…………潰すぞ」

「う」

目で威嚇して追い返す。たいていの人間はコレで尻尾を巻いて逃げる。

(小物が)

「……つまらないな

誰にも聞こえないような小さな声で彼女、椰子やなごみは呟いた。

そして一日が終わる。

## レオナルド

校門が閉まる直前、あわただしくかける人影が一人、俺とカニーだ。  
「つたく、また遅刻、ギリギリだ、懲りもせず朝デッドなんかしやが  
つてこのチビは」

「うつせーーデッドを聴いて一日が始まり、デッドを聴いて一日が  
終わる、これがボクのライフスタイルだもんね！つーか誰がチビじ  
や！？」

こんな感じで今日もまた遅刻、ギリギリで登校。どうにかならんの  
かね、カニーの朝デッドは……。

本日はテストの成績順位の発表日。全員廊下に張り出される結果  
に釘付けになる。

1位 霧夜エリカ 800点

オール満点である、さすが姫。

「やっぱ姫つて頭いいよね……」

「ああ……」

俺もカニーも感嘆の声を上げる。

ちなみに俺の順位は丁度真ん中辺り。カニーは……聞くな。

一時間田は英語。祈先生の担当教科だ。

普段はおちゃらけな祈先生だが授業は厳しく、スバルタなので私語も居眠りも厳禁だ。

「フカヒレさん、のんびりしますわね、このままですと、一年生をもう一回、ですわ」

男子から先に呼ばれて、答案と一緒に祈先生の一言をちらつ。

「伊達さん、貴方ならもっと出来るはずです、期待していますわ」

それは賞賛、慰労、叱責、脅迫、激励と実に様々。

「対馬さん……点数はまあまあですがあまりに特徴がなくてつまらないですわ、もう少し正解か間違いを増やしてください」

俺は訳のわからん言葉だった。

「続きまして女子、浦賀さん、まだまだですわ」

無表情。

「カニさん、期末には一寸の虫にも五分の魂を、期待しますわ」

呆れ顔。

「霧夜さん。言ひことなしです。相変わらず素晴らしいですわ」

笑顔。祈先生は表情を口々口々変えて答案を返していく。

「よつぴー、ひっかけ問題にひっかかるたつてありますわ」

点数 자체は素晴らしいですわ

「先生までよつぴー言わないでくださいよ……」

諦めよう佐藤さん、もうそれが定着してゐるんだ。

「祈先生って人によつてコメント露骨に違うね……」

確かに……丁寧な言葉遣いなのだが、言つてゐることがかなりシビアである。

「くそつ、またフカヒレの点数見て心の傷を癒すぜ」

「フカヒレ君は何点だったのかなあ、彼には負けたくないなあ

点数の低い連中の声が聞こえてくる。フカヒレよ、お前は本当に  
こういうときだけは人気者だな。

「なお、通常は30点以下なら赤点追試ですが、英語のみ、50点  
以下の場合から追加プリントをやっていただきます」

「えええーっ」

「その課題をやつてこなかつた方は……残念ながら“島流し”にし  
ますわ」

良かった、俺68点で……。

そして昼飯、本日は毎週恒例の学食30円引きの日だ。

「先行くぜ、よつとお！」

スバルが先行して2階の窓から飛び降りる。

「じゃ、俺も先行くわ、じゃあな臆病者<sup>フカヒレ</sup>」

「あばよ臆病者<sup>チキン</sup>」

俺とカ二も飛び降りる。

普通に危ないが俺とスバルは運動神経が高いし、カ二は体が軽いか  
ら全く問題ない。

フカヒレだけは無理。

「ちつくしょう、俺を仲間にしあがつて！！」

そんな声が聞こえたような聞こえなかつたような……。

大学食は竜鳴館の名物の一つだ。

野外には海も見えるテラスがあり、そこで食つ飯は格別だ。

「それにしても、島流しか……流されるのは欲望だけで充分だよね

水平線の先に見える小さな島、竜鳴館所有の無人島、『烏賊島<sup>いかじま</sup>』

だ。

祈先生が言つていたように成績不良者や素行不良者は、あの島に流される。

そこで性根を鍛え直されるのが、通称『島流し』。大学食と並ぶ竜鳴館の名物である。

以前典型的なツッパリヤンキーが、島流しにされ、戻ってきた時は聞き分けの良い子に変わり果ててしまつたという話だ。こんな破天荒な学園なのにド派手な不良がいなのは、こいつらが抑止力になつているのが大きい。

「じゃ、俺集会あるから」

フカヒレがそう言つて席を立つ。

集会とは霧夜エリカファンクラブの集会である。フカヒレはその広報部隊所属。  
親でも反<sup>アンチ</sup>でもない俺から見ればよく分からぬ集会だ。

「あ、そうだレオ、お前も来てくれ、出頭命令が出てるんだ」

は？

「何で？」

「ほら、お前姫と割と仲良<sup>いじやん</sup>い、お前と姫の関係について確認したいって監が言つてさあ」

面倒くせえ……。でも変な噂立つのも嫌だし、仕方ない行くか。

「まずは広報部隊、研修へ今までの姫の様子を報告してください」「うす、相変わらずテストはオール100点、2位に影も踏ませずぶつちきりトップです」

親衛隊長の言葉にフカヒレが答える。

「また、のどが渴いたといってそこら辺の男をパシリに使つたり……」

.....」

..... よくもまあ一つの話題で口口まで騒げるな。

まあ当然と言えば当然か、姫にはそれだけのカリスマ性と実力があるし、かく言う俺もあそこまで自分を貫ける彼女を結構尊敬しているからな。

「で、そろそろ本題に移るけど、対馬君」

「あ、はい？」

「君は姫とはどういう関係なんだ？」

姫との関係.....。

「悪友かな？姫の事尊敬はしてるけど別に恋愛感情は持つて無いし」「本當か？一言は無いな」

俺の言葉に細めにオールバックの男が訝しげに訊ねてくる。確かにこれは2・Aの.....。

「ああ、少なくとも今の俺にそういう感情は無い、安心しろ村越」

「村田だよ！村田洋平！！村越って誰だ！？」

ああ、そうそうコイツ村田だ。

ついでにその後ろに居る女子は写真係で村田と同じクラスの西崎紀子（にしざきのこ）だつけ。

「おいおい、お前村田知らないの？2・Aの秀才で地獄育ちの男で有名じやん」

フカヒレが背後から小声で話しかけてきた。

「地獄って何が？」

「村田洋平には12人の妹がいてアイツに懐いているらしい」

「それ天国じゃないのか？」

「ただ、全員すんごくブスなんだ」

「地獄だ！」

何て意味の無い設定なんだ.....村田洋平恐るべし。

「で、写真係の可愛い女の子が西崎紀子、2・Aのマスクottみたいな娘で写真が趣味で広報委員会所属」

「やけに詳しいな」

「村田とは一年の時同じクラスだつたし西崎さんは可愛い系として名を馳せてゐる、つまり2人とも2・Aの有名人なんだよ、お前がそういうの無頓着なんだ」

「ふーん……ま、別にいいけど  
どーでも。

んで、ようやく長い集会が終わり俺も解放される。

「あ、やつぱりココにいたわね」

「なんだ近衛、お前アンチ姫じやなかつたか?」

「……嫌なのが来た。赤髪ツインテールでいかにも強氣つて感じ  
の顔、俺の最も忌まわしい記憶の当事者の一人、近衛素奈緒このえすなおだ。  
近衛のほうも俺と喋る気は無いらしく俺と目が合つても一睨みして  
きただけで終わつたが……。

「おいフカヒレ、いい加減レオ返せ～～

うわ、力二の奴なんてタイミングの悪い。

「ん? げ、何でツインテールがココに居んだよ?」

詳しい説明は省ぐが、力二と近衛は日茶苦茶仲が悪い。その近衛  
がココに居るのに気付いて力二は一気に不機嫌になる。

「何よ、私だつて来たくて来てるわけじやないわよ、第一いきなり  
突つかかつてくるつてどういうつもり?」

近衛の奴もますます不機嫌に……。

「ハ! 自分の胸にでも聞けよ赤毛猿、來たくないなら来んじやねえ  
よ」

「何ですつてえ!~

あーあ……やつぱりこいつなるか。

「アンタ本当にトサカに来る!~」

「けつ! ボクはお前の存在自体が氣に入らないんだよ!~お前の所  
為でレオはなあ……」

「力二!~」

「……ツー。」「メン」

俺の怒声にカーニは口を滑らせかけた事に気付き、引き下がる。

「戻るぞ」

「う、うん…………悪い、レオ」

「いいんだよ、次から氣をつける」

軽くポンポンとカーニの頭を撫でるよついに叩き、俺達は屋上を後にした。

対馬レオの日常 夜&二日目（後書き）

次話は今夜0時に投稿予定です。

## オアシスでの出来事 辛口キング（クイーン）登場！！

レオSIDE

放課後、今日は英語の補修があつたので遅くなり、空はもう夕方になっていた。

その後スバルとフカヒレの二人と合流し、カニのバイト先であるカレー専門店『オアシス』で晩飯という事になった。

「いらっしゃいませーつ……って、何だフカヒレ達か」

この松笠市の名物はカレー。

キヤツチフレーズは『カレーの街、松笠』。

町中にはカレー屋が数多く点在しこの『オアシス』も例外ではない。「ご注文はお決まりですか？『可愛いウエイトレスの気まぐれオスメコース』なんていかがでしょうか？」

「そのコースは福神漬け大盛りとか来るからイヤだね、ビーフカレー甘口」

「チキンカレー辛口、ライス大盛り」

「ポークカレー辛口、ルー多めで」

「ノリの悪い……日本人はこれだから、ちょっととはインド人のテンチヨーを見習えってんだ」

「H A H A H A」

落書きみたいな顔をしたターバン男（店長）がカレー作りながら笑う。

あれ本当にインド人か？

「店長の名前はアレックスって言うんだ」

絶対インド人じゃない……いやいや、そんなのどうでもいい、要是ココのカレーが美味しいか否かだ。

カレー好きのカニがまかない目的でバイトに入っただけあってこの店のカレーはかなり美味しい。まあ、じっくり味わおう……。

「いらっしゃいませーつ

来客を知らせる鐘に素早く反応したカーニが、突然硬直した。

「……」

シャギーのかかつた長い黒髪、鋭い切れ長の瞳に背丈は170センチを超えているだろ？

細身のジーンズに赤いスカジャンという格好は、活動的というより攻撃的に映るが、それを差し引いてもかなりの美人だ。

「おっ、美人」

それも顔にうるさいフカヒレが認めるほどの美人だ。

「ぬおおおおおおお！ 来たーつ！ テンチョー！ 辛口キン

グだ！」

おい、女にキングは無いだろ……。

「OH！ 落ち着きマショウ、カニセーん、まずはオーダー、デース

「……ご注文は？」

「超辛スペシャルカレー、チャレンジ」

キングはクールに答えた。

「超辛スペシャルカレー入りましたー！」

あ、アレをか？

「超辛スペシャル……おお、完食すればタダ。何度でもチャレンジ可能つてコレか」

「以前俺、あれにチャレンジして一口でダウンしたんだけど……変な汗出たよ」

超辛スペシャルカレー。俺も挑戦した事はあるが……。

一般人なら一口で炎上、三口で発狂、そこから先は地獄で、次の日もトイレで地獄。

俺でさえ七口が限界だつたんだぞ！！

「シイイイイット！ おそらくまた食べられてしまいマース、ここは白旗あげまショウ！」

「くつ……それしかねーのか……。だから何度もチャレンジ可能は無限コンボ喰らうからやめようって言ったのに

早くも諦めモード、あの女マジで完食したのか？

(ニヤリ)

あ、笑つた…………どう見ても嘲笑だが。

「笑いやがったなあのアマあ！ ちょっと胸が『力そりだからつてい  
い気になりやがつて！ 構わないやテンチョー、完食されたらボクの  
給料から差つ引いていいから、勝負を受けよう！」

さすがカニ、勝算が無くとも諦めない蛮勇の持ち主だ。

「そこまで言い切るならいいデスけどー。すでに一回完食されてる  
のに勝算とかソウイウノあるんデスかー？」

「なあに、香辛料を限界まで入れれば大丈夫、火い吹くから」

「ソレ、普通に致死量デスよー」

「構わないっしょ、別に」

鬼だ、カニの皮被つた鬼がココに居るよ…………

「味を落とさずに、コレ以上辛くするの大変なんデスけどねー、わ  
かりましター」

いや、止めるよ店長…………。

「つてわけで、超辛カレーお待たせしましたー」

王の卓に置かれたのは、赤味の強いカレー…………ブクブクと  
氣泡が上がって、ありや最早カレーじゃねえよ。

「いただきます」

一切の動搖も無く、キングは超辛カレーを食べ始めた。

(もぐもぐ)

一口、一口……ぜ、全然ダメージを受けてない…………。

「やつぱりおいしい

そしてこの台詞である。

「おいおい、平然と食つてるぞ、何者だありやあ

「味覚、絶対ぶつ壊れてるぞ…………」

俺もスバルもあいだ口が塞がらなかつた。

俺でさえ七口で敗北したあのカレーをああも簡単に…………くそぅ、

プライドが傷つくぜ。何のプライドかは知らないが

「よつしや、今こそ俺がやりたかったことを実行してやる。おい、バカ面してるウェイトレス！」

? ..... フカヒレの奴何する気だ？

「んだよ、ダメ人間」

「あの美人に、セイロンティーを」

「その出来の悪い脳みそでも、“あちらのお客様からです”って言うのだけは忘れるなよ！」

「いいよ、セイロンティーね」

ニヤリと笑つてカニが準備に取り掛かる。またよからぬことを考えて……。

「サービスのホット・セイロンティーですうーちなみに、あちらの眼鏡をかけたお客様からです」

ほりやつぱり……あの超辛にホット・セイロンティーって……死にかねんぞ。

「ばつ……辛いもん食つてんだから普通アイスだろ、なんで湯気出でんだよ」

「ン……グツグツしてていい、カレーに良く合ひ」

カニの期待は大いに裏切られ、キングは悠々とセイロンティーを飲み干す。

「そんな馬鹿な……。喉を火傷させて殺すつもりで熱したのに」「おいしかった。全部食べたから無料ね」

恐ろしい女だ……。

「ウアアウ……その通りデース。ありがとう」やこましターつ！

「セイロンティーごちそうさま」

帰り際にそう言った。ただしぶつきひとつであるが。

「あつ、いえいえどういたしまして…………へへへ、あの口と会話しちゃつたよ」

あの程度で喜ぶか、コイツはコイツで別の意味で凄い。

「くうつ……負けた……、完食された……」

結局、カニはバイト代から超辛カレーの代金を差つ引かれたので

あつた。

オアシスでの出来事 辛口キング（クイーン）登場！（後書き）

次の投稿は本日の正午です。

## 再会 鉄の風紀委員、鉄乙女ーー！

レオSIDE

走る、疾走する。

本気を出せばもっと凄い速さを出せるが、如何せんカニをつれてい  
る以上見捨てるわけにはいかない…………いや、見捨てても良いん  
だけどそれだと後が厄介になる。

え？何故俺がこんなに急いでいるかって？

決まっている、寝坊して遅刻寸前だからだよおーー！

俺とカニだけじゃなく、スバルとフカヒレもだ（結局いつものメン  
バー）。

そして…………。

「無情だ……」

「くう……見事に校門閉まってるじゃん、こうなると遅刻届貰うし  
かないんだよね？」

「いや、俺は納得しないぞ、折角頑張つて走ったのに、こうなつた  
らフォーメーションで裏側から入ろうー！」

よし、久しぶりにやるか。

校舎の裏側に回り込み外壁の前に立つ。並の人間ならこの高い壁を  
飛び越えるのは無理。だが俺達は4人で連携すれば簡単だ。  
まず俺とスバルをジャンプ台にカニとフカヒレが壁を上る。  
続いてスバルが俺をジャンプ台に壁を上り、最後に俺が単独で壁を  
飛び越える。

コレでも俺は日払いのバイトで軽業をやってたりするので某名無し  
の少年並に身軽なのだ。

何はともあれコレで全員潜入成功。後はこのまま何食わぬ顔で校舎  
に入れば万事解決だ。

「そこの4人、ちょっと待て」

後ろから凜とした声が聞こえた。

だがまだ後ろは振り向かない。顔を見られるわけにはいかない。

「どうするよ？」

「当然、逃げる……」

一斉に逃げ出す俺達4人、しかし……。

「止まれ、止まらないと制裁を加える」

「おい、何か言つてるぞ」

「止まれって言われて止まる馬鹿はいねえよ」

「俺も逃げ足だけなら自信があるぜ」

「こいつらは頼もしい事を言つてくれているが……何だ？妙な不安が……。

「警告に従う気は無いと判断した……実力行使だ」

「！？まずい、あの女！！」

「止まれ、皆！逃げても無駄だ！…！」

「ふむ……賢明な判断だ」

一瞬女の殺氣が薄れた。

「何言つてんだよ！諦めたらそこで試合終了だらうが……！」

「俺は逃げ切るぞ！たとえ友を見放しても……！」

カニはいつも通りとして、フカヒレお前は最低だ。

「坊主が血相変えて止めてんだぜ、止めた方がいいんじゃね？」  
さすがスバルよく分かつてらつしゃる。

「ぶげらつ！？」

「うぎや！」

もう遅いけど…………。しかしこの女、ビコかで……。

「一撃で終わりか……」

アレは、たしか……ガキの頃。

「根性無しが

！！

お、思い出した。アイツは、あの人は……

「くちび」たえするなコンジョーナシ！やしかつたらわたしにかつてみろ！」

「お、乙女さん？」

「ん？レオ、お前ようやく思い出したのか？」  
やつぱりだ……。

「知り合いか？」

「従姉だよ……」

「は？それって前に言つていたあの……」

「ああ、あの鉄乙女さんだ」

俺の運命を変えた張本人だ。

で、説教タイム突入と相成った。

「本来、こういうものは同じ学年の風紀委員が注意するのが筋なのだがな、あいつはもう、自分では抑えられないと言つている」「クソ、2年の風紀委員（名前知らない）め、アイツの方がよっぽど根性無しだ。

「なんだよ！じゃあ俺が感じた視線つてこの女のだつたのか！」  
「この女、だと？」

「ひつ、ひいいいいつ——！？」

いかん、フカヒレのアホがトラウマ発動してやがる。

フカヒレこと鮫氷新一には姉が一人いる。彼女はとても美人だが、筋金入りのドSであった。

フカヒレのトラウマは相当重く、下手にトラウマが蘇ると恥も外聞も気にせず泣き叫んでしまうほどに……。

ちなみに、現在フカヒレの姉は家を出ており、東京で働いている。  
「お前たちは特に違反が多い。とりあえず今週見た限りでは、屋上への侵入、廊下の爆走、図書館での飲食、下校時間の超過、漫画持

ち込み……だな

「畜生……偉そうに説教しやがつて……」

「止めとけ、相手が悪す。アガル」……闘技場で言えばチャンピオンクラスだぜ」の人」

小声で恨み言を呴く力二を諫める。

「うう……」

悔しそうに唸る力一。普段なら絶対噛み付いていたりうがチャンピオンクラスが相手では相手が悪すぎるという事は俺という実例を持つて痛感しているのだ。

「しかしレオ、まさかこんな形でお前と久しぶりに話す事になるとは」

「うん、まあね」

「どうか、さつままでこの女さんだつて氣付かなかつたから。

「まったく、今の今まで忘れていたとは、嘆かわしい……生活も少々自堕落氣味みたいだしな」

ヤバ……説教の丞先が俺二。

「ほう、派手にやつているようだな、良いぞ良いぞ」

あ、館長登場。

「館長、おはよひざれいます」

「おはよつ、鉄、今日も指導か?」

「はい、先輩として後輩を導いていました」

「うむ!な らば 良し 一ビシビシ鍛えてやれ」

さすが館長、ノリが体育会系だ……。

「では皆、今日も勉学に励めよ!」

そう言つて館長は去つていった。

「まあいい、とにかく近い内にお前の家を訪問するからそのつもりでな

マジですかい……。

「そろそろエ RRだ、わかつて行け」

「はこ……」

やつと解放された。

ん?

「よつと、セーフティー！壁越えクリア！」

姫。

NO SIDE

昼休み

「畜生おつ！黒豆おかめ！ゼッテー仕返ししてやる」  
完璧な逆恨みであるがカニの闘志はみなぎっていた。

「戦闘力がレオと同等でも不意を付いて痛手を喰らわせればアイツのプライドはズタボロじやあ！…」

最早勝つことよりも一矢報いのことに主眼が置かれている。

「フカヒレ、お前も来い！…」

「は、俺？やだよ、ああいうタイプねーちやんに似てて怖いんだよ」「いや、やられっぱなしだからこそその克服でしょ？やられえっぱなしの君でいいかい？」

「そ、そうだよな、確かに俺のイズムに反する」

「フカヒレがいつも主張してる事は何さ」

「女の子は男に屈くすべしー！レは古来からの鉄則であるー」「どにが？」

「勘違いしている女は教育してやるッ！」

ツツコミ所満載の理論でフカヒレは燃え上がる。

フカヒレのこの主張は数年前に遡る。

当時のフカヒレはクラスメートの女子を自分のガールフレンドにしようとして告白した、しかし……

「フカヒレ君つてザリガニの臭いがするからイヤ」  
見事玉砕。

「そんな……俺本氣だつたのに……」

「何泣いてるの……やだ、気持ち悪い……」

フカヒレはレベルが上がつた！女を殴れるようになつた。

とまあ、こんな感じである。

「ま、そんなわけで俺は女子供には容赦しねえ」

「言つてる事は最低だけど今はそんなフカヒレが頼もしいなつ！」

そんなこんなで馬鹿二人は勝ち目の無い戦いに出陣する。

そんな様子をレオとスバルは呆れ顔で見つめていた。

そして……

「いくら強いといつても女子は女子！男子の腕力の前には……」

「制裁……！」

「ぐつぼああああ……！」

フカヒレ、気絶して廊下でお寝んね状態。

「この役立たずが地面にキスしてな……！」

更にカニの容赦ない追撃が入る。

「おい小さいの、もう気絶しているぞ……というかソイツはお前の仲間じゃないのか？」

「お前じゃないやい、蟹沢つていうちょっと微妙な苗字があるんだからなつ！それに小さいって何だ」「ラ……！」

「そんなに気にする事か？顔がそれだけ可愛ければいいじゃないか」乙女は何気なく言つたつもりだろうがこの『かわいい』という言葉はカニの脳髄まで響いた。

「…………乙女さんつてさあ、よく見たら結構格好いいね」

蟹沢きぬ、陥落……。

そして翌日の木曜日

## レオ SIDE

現在俺は乙女さんに何時リベンジを挑むか+リベンジのための適当な口実を考え中だ。

「対馬君、鉄先輩が呼んでるよ」

向こうから来ちゃったよ……。

また説教か?

「スバル、30秒後に電話頼む

「あいよ」

それだけ聞いて廊下に出る。

「ん、来たか……」

「うん、で、何か用?」

ジャスト30秒、やれ!スバル!!

「ああ、すでにご両親から話は聞いているだろうが、私が明日から

……」

（ストリートファイターのM・バイソンのテーマ）。

携帯に着信が入る。さすがスバルだ、時間ぴったり。

「あ、ちょっと『ゴメン、もしもしつつ……え、マジで、うん分かつた……』『ゴメン乙女さん、急用入った』

「ん、そうか?まあいい、どの道週末にまた会うんだからな」

よし、華麗にスルー出来たぜ。

しかし俺はまだ知らなかつた。この時乙女さんが話そつとしていたのは非常に重要な事実だという事を。



再会 鉄の風紀委員、鉄乙女ーー！（後書き）

次の投稿は今夜0時です。

心とは何ぞや？

## レオ SIDE

本日は毎週恒例の館長による授業、『心』を学ぶ独自のカリキュラム、その試験結果発表である。

「うむ、全員出席か、実に結構」

いや、アンタの授業をサボる命知らずはココにはおらん……。

「いつの世になつても体が資本であるのに変わりはないからな、それではこの間の試験を返却する！全員、戦場で敵を倒す兵士のように元気良く答案を受け取るように！」

…………ノリが最早戦時中だ。しかし口がそんな事は裂けても言えない。

「俺、これだけは点数いいんだよな」

フカヒレは試験の名前を書く欄、男・女の男の部分に一重線を引き、『漢』と書くアホだ。

だが、これをすると館長は5点アップしてくれる。それで良いのか？だが問題は結構面白い。『問1 お前の主張を書け』や、『問2 百人の命と一人の命、どっちを助ける？』など。

「とりあえず百人つて書いたら もらったよ」

「気分によるけど、もちろん両方助けるわよ、私、結構欲張りだし」

「人と百人、その百人が他人で一人がダチだつたとしたら、オレは一人だね」

「美人だけ助ける。後は自力で生き延びてくれ」

「うーん、私わからないって書いたらバツだつた……どっちが正しいかわからなくて……」

上からカニ、姫、スバル、フカヒレ、佐藤さんである。人それぞれ色んな考えがあるというのがよく分かる。

え？俺はなんて書いたって？

『出来る限り多くの命を助ける、100人も1人も関係なし、ただし助ける優先順位は選ぶ』だ。

「ま、若い内は色々やってみるが良い。恋愛、旅、スポーツ、勉学、何でも構わん」

何だかんだ言つてもこの人の言葉には重みがある。それがこの竜鳴館のクオリティの一つなんだろうな…………。

「いざれそれがお前たちの『力』になるだろ？、例えば、儂のよう

に体を日々鍛えていれば、熊九頭までなら素手で倒すことも可能になる」

（それはアンタだけだ）

まあ2～3頭ぐらいなら何とか出来る自信はあるが…………。

「もし、日々がつまらぬ。日常がつまらぬ。毎日が同じことの繰り返しで何か刺激を求めている者がいたら、儂のところへ来い儂が心身を鍛え、面倒見てやろう」

それはそれで面白そうだが怖いと言つ思いが強いので止めとこう

……。

ようやく一田の授業が終わって帰りのH.R。今田は中間考査の結果の総括。

「2-Cは7クラス中4位と、問題児揃いにしてはまずまずではありました」

祈ちゃんよ、仮にも担任ならそういう発言は控えてくれ。

「ですが、仇敵である2-Aには及びませんでした」

祈先生とA組の担任は対立関係にある。テストの成績でよく賭けをしているから、それに負けるのが癪らしい。つていうか俺達を勝手に賭けの対象にしないでよ…………。

「霧夜さんのワンマンクラスと言われては皆さんも心外でしょうし、

「」は一つ期末で順位昇格を狙おうではありませんか

アンタの懐のためにか？

「」で土永さんから一言

「いいが、テストなんてただの記号だ。生きるための知識として通用するのは多くない……だが、しつかりやつといていい点取つてりや進路も増える、ぐだらねえがこれが日本のシステムだ、ま、がんばれや」

「……と、土永さんが言つてますわ」

正論だが……オウムに言われたくねーよ。

「あくまで私が言つたのではなく、オウムが鳴いただけ、というのをお忘れなく」

そしてこの台詞である。「」人は「」という所が抜け目無いんだよなあ……。

そしてまた、夜のダベリ。

暫くはタイトルマッチも無いので監でのんびり出来るぜ。

「しかし、乙女さんか……俺のねーちゃん程酷くは無いけど、同情するぜ」

姉にトラウマの有るフカヒレが俺を哀れむような顔で見てくる。

「まあ、確かに規則正しい分うるさいからな……昔は恐怖の対象だったからな

ま、いざれリベンジするつもりだけど……。

「そうそう、分かる分かる、姉ってさあ、怖いだけなんだ、人の体兵器で実験に使うしさ、背中に爆竹入れたりするんだぜ」

「そりゃお前ん家のねーちゃんだけだ」

たまに恐ろしくなつてしまつ。あの時リベンジを誓わなかつたら俺はフカヒレの同類になつてしまつたのではないかと……。

「あ……あ……あ……やべえ記憶が蘇ってきた……！」

突然フカヒレが震えだした。トラウマモード突入だ。

「あーあ、トラウマが発動しちまつた」

「いりになると放置しておくしかないね」

「うわーん！止めてよお姉ちゃん、いくら声が似ているからって僕をM字ハゲにしないでよー！」

「難儀な奴だな」

フカヒレがトラウマから解放される口吐き来ないだろうなあ……。

…………あ、そういう女さんが明日会いつとか言ってたけど、家に来るのか？  
…………ま、いつか。

心へ向かへや？（後書き）

次話は本日正午投稿予定です。  
ストックの残りがあと少し……。  
まあ、あんまり気にしませんけどね。

## レオ SIDE

土曜日の朝。俺は目を覚まし休日の恒例である片手逆立ち腕立て伏せを開始する。左右それぞれ100回で1セット、コレを3セット繰り返す。ちなみに普通の片手腕立てなら高速でも100回は普通にイケる。

コレを始めてもう結構経つ、割と続いているんだがどうにも俺は筋肉が付き難く、そのため割りと細身だ。  
ま、そのおかげで無駄な筋肉が無く今みたいに身軽になれたなんだけどな。

「98、99、100……よし、まずは1セット」

## 『ピンポーン』

「?……はーい、今出ます」  
丁度1セット終わった頃、呼び鈴が鳴った。  
「おはよう」  
「乙女さん……本当に来ちゃったよ。」「おはようございます……」  
「うむ、盟約どおり、私は今日からここで暮らす」  
は?  
「あの、それはどういふ……」  
「その間の抜けた顔は寝起きだな……私は勝手にやるから、顔でも洗っている」  
そのままズカズカと家の中に入つていいく乙女さん。  
「……取り敢えず顔洗おつ」  
冷水で顔面を濡らして頭を落ち着かせる……よし、落ち着いた。

そして結論ついで、やつぱりおかしい。

暮らすつてどうこう……

「聞かなかつたのか？私はここ卒業まで逗留する」　逗留つて古い言い方だな……つて違う違う違う！

「…………」

「疑問文の応酬だな」  
誰がこういふとせう。

「レオはだいにも頼りないからビシバシ鍛えてやつてくれと言わ  
てな、空手も破門されてしまつたと聞いたしな、私もお前には鍛錬  
の必要ありと感じた、だから『』に来た」

「本来ならお前が鉄家に来れば話は早いのだが、爺もいるからな……だが、私の実家は東京だ、通学には遠すぎる、実際私も朝早くから電車を乗り継いで通学していたが、家が遠くて不便だったからな、だが、ここなら徒歩十分だ、私だって空いた時間を使前に使えるし、お前も引っ越さなくてすむ、家賃も無いし正直悪くない話だと思つたぞ」

さい  
で  
す  
か

「受験勉強もここでするの？」

「私は推薦狙いだ、成績は問題ない、むしろ学校が近くなり、より風紀委員や部活に精が出せる、推薦狙いには丁度いい

「でもさ、推薦狙いが男と同居してるとてマズくない？」

「私とお前が赤の他人なら、それこそ大問題だかな。  
新潟同士で何か問題なものか？」

「乙さんのご両親はなんて？」  
「もちろん両親も同意の上だ」

「俺の同意は？」

「……お前、私が嫌なのか

嫌つて程じやないが、今すぐ同意しようと言われてもなあ……。

「乙女さんはそれで本当にいいの？俺と一つ屋根の下だよ？」

「私は一階の客間、お前は一階、たまご気にならん、第一軟弱なお

前ごとに襲われるほど私はやわではない」

ん？聞き捨てならん言葉があつたが……まあいい、まあは……。

「ちょっと待つて、親に確認する」

結果、両親も同意でした、ハイ。

「どうだった？」

「『伝えるの忘れてた』と

なんつー親だ。

「コレで問題ないな」

「まあね、俺の意志以外は……性格合わないと御づよ、俺テンションに流されるの否定派だから、主導権が俺にあるつていうなり話は別だけど

「その性格を含めて鍛え直すんだ、軟弱とテンションに流されない事は違う」「うう、そういひつ。

「言つてくれるじやん……でもさ、俺だつて意地つてもんがあるんだよ、少なくとも古い情報だけで心身ともに俺を舐めきつてる人と一緒に住みたいとは思わないね」

俺が挑発的に笑つて見せる乙女さんは余裕綽々と言つた感じに笑みを浮かべた。

「随分自信満々だな、何ならかかつてくるか？一撃でも入れることが出来ればお前の勝ちにしてやる」

舐めやがつて……！だけビロベンジマッチとしては悪くない……！

「それじゃ…………！」

一瞬で距離を詰める。

「…？」

乙女さんの表情が一瞬で驚愕に変わる。その隙を見逃しはしない！

スピードに乗せた左フックを乙女さんの眼前で寸止めする。

「…？（み、見えなかつた……だと）」

寸止めとは言え思わず一撃に狼狽する乙女さん、当然だ、油断しきつている状態で俺のスピードは捉えられない。館長クラスであれば話は別だが……。

「『男子三日会わざれば刮目して見よ』……それは俺にも当て嵌まるんだぜ」

「…………レオ、お前」

「ルール変更して戦る？戦るつて言つなら本気出さないとね、お互  
いにさ！」

挑発的に笑つてやる。もつ俺はアンタに駄馬と呼ばれていた俺じ  
ゃないんだ。

「…………お前への認識を改める必要があるな」

静かに此方を睨みつけてくる乙女さんに俺は表情を引き締める。

「口口じゅ何だし、場所移そつか……」

「そうだな、学園の道場で戦るぞ、あそこなら今田は人がいないか  
ら思つ存分戦れる」

上等、白黒はっきり付けてやるよ。

フカヒレSIDE

街を歩いていたら妙な光景を見た！

レオと乙女さんが一人揃つて歩いてやがる。

しかもレオの表情、滅多に見せない戦闘モードだつたし！なんか凄い事になりそうだ、カニとスバルにも知らせねえと……。

## エリカ SIDE

突然頭に何か妙な感覚が走った。虫の知らせつて奴かしら？  
「学校の方？何かビッグイベントな予感」

**雪辱日和（後書き）**

次話は今夜0時更新予定です。

## 激突！～若き獅子の咆哮～

レオSHIDE

更衣室で愛用のタンクトップとパンタロンに着替え、道場にて乙女さん（乙ちは拳法着）と相対する。しかし……。

「何でこいつてんの？？」

「私に聞くな」

周囲には力一達+姫、更には館長まで居る。館長は審判を買って出てくれたからといとして……。

「つまおおおおおーこつかはやると黙つてたけど遂に始まるぜ最強のドリームマッチー！」

興奮してはしゃぐ力一、「つまおーこつかー……」。

「まさかこんなに早くレオがリベンジに挑むなんてな、俺の予想じやあと1ヶ月ぐらいは掛かると思ってたのこ」

「乙女センパイに向處まで持つかしら？」

「姫、俺が負けること前提で考えるなよ。

「いや、レオはある見えて強いぜ、普段喧嘩なんてしないが見えない所で相当場数踏んでるからな」

皆口々に言いたい事言いやがつて。

「では、準備は良いな？」

「こつでも構いません」

「乙うちも

「つむ……ルールを確認しておぐぞ、噛み付きと田潰し、急所への

集中攻撃は無し、それ以外は特に問題ない」

「そいつは良いお互い全力で闘り合えるつてもんだ。や

「では……始め！」

館長の怒声と共に俺達は互いに踏み込んだ。

## 乙女SIDE

両者同時に踏み込む。先に仕掛けたのはレオだ。

「ラアッ！！」

とてもなく速い拳が連続して私に襲い掛かる。

(！？……速い！)

すかさず腕でガードするが……は、速過ぎる……ガードが追いつかない。

「クッ……」

数発喰らつてしまつた、なんて鋭い拳だ……。

「だが、パワーは私が上だ！！」

レオの拳に耐え、カウンター気味に此方も拳を繰り出す。

「グウッ……」

掌で受け止めるがレオは苦悶の表情を見せる。

「痛つてえ、つたく、何てパワーだよ……」

一寸距離を取り合い、レオは私の拳を受け止めた手を振りながら言つ。

「そつちこや、とんでもないスピードだな、軟弱といつ葉は撤回してやる」

認めざるを得ないな……コイツはもつ根性無しだった頃のレオじゃない。

だが、勝つのは私だ！！

レオSIDE

「準備運動はコレで終わり、ここからは本氣で行くよ<sup>マジ</sup>

「いいだろう、こちらも存分に行かせてもらつ」

再び構えてじりじりと距離を詰め、一定まで近づく。

「ハアアアアアアア！」

今度は乙女さんが先に仕掛けてきた。

とんでもない威力の右ストレート、正面突破か？当然身を屈めて避ける！

「墳つ……」

「ゲ！？読まれた！膝が目の前に……！」

「チイツ！」

さつきみたく掌で防ぐが、勢いは大して衰えず俺の手諸共顔面に入る。

（痛つでえ……）

手がクッショーン代わりになつたとはいえかなり痛い。まともに食らえば大ダメージは必至だ。

（けど元は取つた！）

「うわつ！？」

すかさず乙女さんの足を掴んでドラゴンスクリューで投げ飛ばし、ダウンさせる。

「もらつた！？」

再び乙女さんの足を掴み、プロレスの関節技スピニング・トゥーホールドで足を締め上げる。

「ウグッ……離せ！」

一瞬苦悶の表情を見せる乙女さんだが即座に空いていた足で俺を弾き飛ばす。

「「…………」」

お互ひ無言のまま体勢を立て直し睨み合つ。

「「！？」」

直後に二人同時に踏み込み、拳を連続して繰り出し合つ。

「ダアアアアア！……」

「ウラアアアア！……」

「」

お互にラッシュの応酬。乙さんのパンチは凄まじいパワーと重さがあつて威力で言えば確実に俺の上を行つてゐる。

だが俺のパンチには乙さん以上の手数とスピードがあり、尚且つスピードによる鋭さが加わり、乙さん程ではないにせよ威力も高い。

「ハアッ！！」

「ウラアッ！！」

お互いのストレートが顔面に入り、俺達は面白いように同時に仰け反つた。

「クッ……やるな……」

「……そりや、どーも」

暫く続いた殴り合いが一区切りし、軽口を叩きあつ。

「そろそろ本氣で行かせて貰うーー！」

乙さんがまた俺に襲い掛かつてくる。俺は再び迎え撃つが……。

「！？」

パワーがさつきより上がつてゐる！？ヤバイ、押し負ける！

「ハアアアアアアーー！」

「ガツ……！」

乙さんの蹴りにガードを崩され、乙さんはそのまま俺の胸板を踏み倒した。

「ゲハアッ！」

「もうつたーー！」

ダウンした俺に馬乗りになつて俺の顔面にパンチの連打を浴びせてくる。

「うわ、顔面をモロに……」

「こりや ヤバイぞ……」

「さすがに乙女センパイが相手じゃここら辺が限界なのね……」

言いたい放題なギャラリー。

(畜生……まだ、負けてたまるか！？)

両手でガードして耐える、耐え続ける。

「これで終わりだ！！」

乙さんがフィニッシュと言わんばかりの拳を振り上げる。たぶんガードも突き破るほどの渾身の一撃だろ？。

（今だ！）

大振りになつた隙に乙さんの頭を掴み、渾身の力で締め上げる。「グアアアアアアアツ！！！」

「ぬお おおおおおおー！！！」

更に力を込めながら乙さんをマウントポジションから引き離す。

「出たぜ！レオの十八番、アイアンクローーーー！」

「グゥウ…………！」、「このーーー！」

「おっヒー！」

蹴りを繰り出して俺を引き離そうとする乙さんだが俺はすぐアイアンクローをはずしてそれを回避する。

「クウ……何て握力だ、今のはかなり効いたぞ…………」

頭を抑えながら乙さんは唸り声を上げる。

「へへ……俺も握力なら乙さんのパワーにも負けない自信があるんでね…………次はこっちが本気を見せてやるよ」

両手の指先に力を集中させる。見せてやるぜ、とつておきのあの技を。

## NO SIDE

レオが指先に力を集中させた直後、その変化は周囲にも伝わった。外見 자체は何も変わらない。しかし何かが変わったのが空気を通じて伝わってくる。

「もう…………あの技は…………まさしく鉄装拳てつそうけん！」

百戦錬磨の武人である平蔵は直感でレオの技の正体を見抜いた。

「《鉄装拳》」

かの豊臣秀吉によつて行われた刀狩によつて民衆は武器を持つ事を固く禁じられた。

そこで生み出された一大活殺術が身の回りの日用品を武器と化して戦う無限流活殺術とそれに対を成す鉄装拳である。

その極意とは、氣で己の肉体をコントロールし、鉄装拳の名の示す通り自らの手足や体を鉄の如く硬く強化する事にある。

強化された肉体は拳や脚はあらゆる物を打ち碎く鈍器となり、手刀は鋭い刃物と化す、文字通り『人間凶器』と呼ぶにふさわしい肉体となる。

なお、現在でも硬く握り締めた拳を『鉄拳』と呼ぶのはその名残である。

男の拳大全より

民明書房刊 世界・

(クツ……何という闘志だ、コレがレオの本当の力なのか?)

流石の乙女も戦慄を隠せない。今までこれ程の闘志を燃やす相手は祖父や平蔵を除いて見た事が無い。

(あれを避けるのは……無理か、悔しいがスピードも手数もアイツの方が上だ、ならば……真っ向勝負だ!—)

元々逃げの一手は彼女の性分ではない。

それならばと正面から迎え撃つ事こそ美德と考えるのが彼女、鉄乙女なのだ。

「行くぜ!—」

俊足ともいえる速度でレオは乙女に接近し凄まじい速度の蹴りを見舞う。

「グウッ……!—? (な、なんて硬さと鋭さだ)」

まるで鈍器で殴られたような感覚に乙女は一瞬ではあるがたじろいでしまう。

そしてそれを逃す程ジンオは抜く無い。

「ノウゼンハシマツルニシテ、アリ。」

咆哮と共にレオは両拳で乙女の顔面を乱打する。

「グ……ガツ！？！」

凄まじい連打に瞬く間に乙女はサンドバック状態になってしまふ。

「…………舐めるなああああ————！」

だが乙女の目はまだ死んではない。乙女が反撃に移り再びラッ

シニの應酬に入ん西蕃  
しかしその邊まゝも上界ほどの世の間で

西野の妻が、娘が、田中は歯みがき机へ寄り腰を下すと、母へ聞こえ

一の鳥が増えて二ぐ。

「我所見到的，就是我所說的。」

「其一」

二〇四

レオの右ストレートをかわし、乙女はレオの頭部をヘッドロックで捉え、そのままレオをブルドッグキングヘッドロックで床に呑みつける。

「ブツ！ こ、の野郎！」

ダメージを受けつつもレオは乙女の髪を掴み、ヘッドバットを叩きこんだ。

さくら

鉄装拳で強化したヘッドバッタ

お互いの顔を傷だらけにして、体中ヌダボロになりながらも二人の立ち止がり、そのまま床だ闘志こ然えていた。

そんな一人の様子にギャラリー達も開いた口が塞がらないといった様子だ。

「ハアハア……ココまで私がボロボロになつてしまつとは見直したぞ、レオ……」

「ハアハア……見直したつて言つならさあ、降参してくれない？」

「冗談言うな、弟に負けるなど私のプライドが許さん」  
レオの軽口に乙女は笑みを浮かべながら答える。

それを見てレオも僅かではあるが笑った。

レオ SIDE

「お互いもう限界の様だな、次で一撃で決めさせてもらひうー。」

クッ……空氣を通じて凄まじさがビンビンに伝わってくる。

何だよこりやあ、俺の鉄装拳と似ているか威力は段違いた

特化型だ。

ウトは必至。

避けるか？　いや、それを許すような乙女さんじゃない。

「来いよ……」

おお、やい、わたくしやうやく、

静かに体と両手に残りの力を込める。  
「行くぞ」 鉄流奥義、真空鐵碎拳しんくうてつさいげん！！！！！

どんな勢いで乙女さんの拳が俺の体を狙って迫り来る

「金」/「金」/「金」/「金」/「金」/「金」/「金」/「金」/「金」/「金」

乙女さんの拳が俺の体に吸い込まれるように入る。

俺の体にパンチが入るその直後から完全に入るまでの一瞬、そこを捉える！！

流石に浅いとはいえた茶苦茶痛い。だが、それでもこの腕を掴む  
！－掴んで、投げ飛ばす！－

一  
な  
！  
？

我武者羅に腕の力だけで乙女さんを投げ飛ばす。

一九四〇年六月

やった 成功だ!!!

がひとつある。

まだ終わりじゃない。止めを急る事は敗北に繋がる。

「『天使のように纖細に』そして……」

そのままジャイアントスイングに捉えて振り回す。

「グウ ウウ

そのままぶん投げ、直後に間髪入れずに接近、再び掴みかかり口

「リング・クレイドルで三半規管を狂わせる。」

傷による痛みを訴える体に鞭打ち、エアプレンスピンで上空に投

げ飛ばす。

「我流連擊・風林火山.....」

「ガーハッ！」

乙女さんが気を失ったのを確認し、俺は彼女を降ろした。

館長が俺の勝利を宣言する。俺は……………勝つた……………！

乙女さんに勝つた。その歓喜に俺は腹の底から叫んだ。



## 激突！～若き獅子の咆哮～（後書き）

### 技解説

#### スピニング・トゥーホールド

仰向けに寝ている相手の片足を取り、自分の足を差し込んで締め上げる関節技。この体勢から差し込んだ足を軸にして自ら回転することで、さらに威力が増す。

元ネタはキン肉マンに登場するテリーマンの得意技。

#### 風林火山

元ネタはキン肉マンの必殺技の一つ。

原作では

相手の身体をつかんで回転しながら投げる（風） ローリング・クレイドル（林） パイル・ドライバー（火） ロメロ・スペシャル（山）

であるが、本作のレオは

ジャイアントスイング（風） ローリング・クレイドル（林） エアプレンスピン（火） 上空への正拳突き（山）

という形にアレンジしている。

#### 鉄装拳

氣で自らの肉体を硬く強化する技。

繰り出される攻撃はレオの持つスピードも加わり絶大な威力を持つ。

イメージ的にはHUNTER×HUNTERの『流』

#### 真空鉄碎拳

氣を拳のみに集中させて放つ渾身のストレート。

基本的な原理は鉄装拳と同じ。

イメージ的にはHUNTER×HUNTERの『硬』

なお、レオの戦闘時の服装はキン肉マンに登場するキン肉マングレーをイメージしています。

次回は本日正午更新です。

## 崩壊つて地固まる

ZO SHDE

闘いが終わってから數十分後、氣絶から目を覚ました乙女の姿はシャワー室に在った。

「負けてしまったか…………」

シャワーから流れ出る水が傷に染みる度に負けを実感してしまつ。「昔のままだとと思って慢心した報いか……アハハ」自嘲気味に笑みを零す。しかしその表情は儚く、悲壮感溢れるものだった。

「くつ……うう…………」

自嘲的な笑いが次第に嗚咽に変わる。

「畜生…………畜生…………！」

声を押し殺しながら乙女は敗北の悔しさに涙を流す。

しかしせめてもの抵抗で叫んだりしない。あくまで声を押し殺しながら咽び泣く。

「…………このまま終わりはしない、私はもっと強くなる……」

思いつきり泣いた後、乙女は強い意志を孕んだ瞳を取り戻す。ただ泣くだけでは終わらない。負けの中にも好敵手を得たと言つ呼びを見出す、それが彼女、鉄乙女の強さなのだ。

レオSHDE

試合の後、カニたちは先に帰り俺も一休みした後帰る支度をする。

「痛くて……うーーいりや明日全身筋肉痛決定だな」

勝利の代償は結構重い…………でもまあ、長年の悲願が達成でき

た訳だし、よしとするか。

「まだ居たのか？」

不意に後ろから声を掛けられ、振り向くとそこには私服に着替えた乙女さんが居た。

泣いた直後なのか真っ赤に充血した眼や顔中に貼つた絆創膏や湿布を見るとさすがに悪い事をしてしまったと思つてしまつ。

「何心配そうな顔してるんだ、お前は私に勝つたんだ、もつと胸を張つたらどうだ？」

そう言つて俺を叱咤してくる。立ち直りが早いというか器が大きいと言つたか、何だかんだ言つてそこいら辺はまだまだこの人には敵わないと思う。

「今日は私の負けだが、次は負けんぞ」

やや挑発的な笑みを浮かべて俺に手を差し出してくる。

「上等、ただし怪我が完治してからだけどね」

そう言つて苦笑いしながら俺は差し出された手を握つた。

「あ、そういうえば、結局俺ん家に住むつて話どうすんの？」

いつの間にか勝負云々になつていていたのですつかり忘れていた。

「ん？ そういうえばそうだつたな、まあ、どっち道勝負に勝つたのはお前だし、お前が決めれば良いさ」

うーん、一人暮らしを取るか、乙女さんを取るか……正直気楽な一人暮らしを捨てるのは惜しい、だけど……。

「一緒に暮らす、かな？ そっちがそれで良いならだけど」

「……」

驚いたように目を見開く乙女さん。え、何？ そんなに意外？

「意外だな、てつきり断るとばかり思つていたが」

「ズタボロにしといて言つのも変だけど、別に乙女さんが嫌いって訳じゃないから、勝負<sup>リベンジ</sup>と家族愛は別物つてね」

「そうだな、私もそれは同じだ、これからよろしくな、レオ」  
そう言って乙女さんは俺の方を向いて満面の笑顔をみせてきた。

## ■ 陥落つて地固まる（後書き）

遂にストックこれで最後。

申し訳ありませんが、また更新速度が以前の状態に戻ります。

あと、感想の制限を解除しました（今気づいた）。

## 歓迎会

### レオSIDE

乙さんとの壮絶な試合の後、流石にズタボロになつたその日は無理なのでその翌日の日曜日、全身筋肉痛の体に鞭打つて引越しの作業を終え、その日の夜はスバルが作った豪勢な飯を5人で囲みながら乙さんの歓迎会となつた。

「よし、宴もたけなわということで隠し芸行こうぜ」

「はーい！ 1番蟹沢きぬ、モノマネいきまーす」

?カニの奴誰のモノマネする気だ？

「テンションに身を任せるなんて俺はゴメンだぜ……」

…… オイ。

「次ぎ戦<sup>や</sup>るときはキツチリ腕磨いて来い、新人漬しなんてセコイ真似せずにな」

「それが、この俺だというのか？ええ、オイ」「ムカついたのでカニの頬を引っ張りあげる。

「ふは、はひほふるははへ（うわ、何をする離せ）」

「いや、コレ似てるぜ」

「つていうかそつくりで面白」

「特徴を良く捉えているな」

「え？俺ってこんななんなの？流石に凹むぞ。

「よし、次は私がやるつ」

2番手は乙さんか、それじゃ、コレ渡さないと。

「はい、コレ」

そう言つて俺は乙さんにリンク<sup>ハ</sup>を手渡した。

「なんだこのリンク<sup>ハ</sup>は」

「片手で握りつぶすんでしょう？」

「『乙女』がそんなことできるか！」

怒鳴り声と同時に乙女さんの手の中にあるコンパンはグシャリと粉々に砕け散った。

結局してゐるじやん……。

「うわ、スッゲエ……」

「……まあ、これは置いといてだな」

リングの欠片を食べながら乙女さんはこちらに向き直る。  
「私がやるのは手品だ、この10円玉が2つに増える」  
(手品? 乙女さんて昔から不器用だったはずじゃ……)  
手の平に10円玉を握り締める乙女さん。

「ワン、ツー、スリー!」

手を開く。中からは一枚だけの10円玉が……。

「一枚のままだけど」

「く……また失敗か……何故だ!?」

無念そうに乙女さんは10円玉を握り締め、10円玉は見事に2つにへし曲がった。

「うわあ、二つに折れた!?」

「底知れない人だな、こんな芸レオや館長以外で出来る人が居るとはな」

つていうか…………。

「手先が不器用なのに手品なんて何故?」

「む……それは秘密だ、それよりレオお前も何かやつたらどうだ?」

え、俺?

「お、そりや良いぜ、その次はスバル、そして締めは俺が格好よく決めてやるよ」

さりげなく取りを手に入れて格好付けようと/or/マイシ……

「おいレオ、ちょっと耳貸せ」

カニが俺に何か耳打ちしてくる…………成る程、そりや良

い。  
「主も悪よのう」

「オメエ程じゃないぜ、へつへつへ…………」

さてと、それじゃやるか。

手の平サイズのゴムボールを5個持ってきて準備に入る。

「フカヒレ、ちょっと来てくれ、お前の力が必要だ」

「ん、何々？俺の力が必要？しうがないなあレオは」

網に掛かった馬鹿が一匹。チョロイもんだぜ。

「対馬レオ、ジャグリングしながらフカヒレを屈服させます

「ちょっと、お前何言って！？」

「レオ、お前ジャグリングなんて出来たのか？」

乙女さんはジャグリングの方に目が行ってフカヒレの事はガン無視だ。

「ちょっと、無視しないでよ乙女さん！」

逃げようとするフカヒレを抑えながら俺は5つのボールを使ってジャグリングを始める。

「姉ちやんが帰つてくるぞ、今すぐお前の所に戻つてくるぞ」

「ちょ、何言つてんだよ、やめろよ…………」

フカヒレに聞こえるように『姉ちやん』といつも葉を連呼する。「ほう、コレは中々大したものだな、今度私にも教えてくれ」「うわーん！やめてよお姉ちやん！飲尿健康法なんて僕で試さないでよう！しかもそれ犬のオシッコだよう！！」

馬鹿の声が聞こえた気がするが、気のせい気のせい（笑）。

一通り騒いで宴も終わりとなり、後片付けの時間となつた。  
「ところでレオ、お前は彼女とかいないのか？」  
乙女さんが唐突にそんな事を訊ねてきた。

「いませんよ」

何故かフカヒレが嬉しそうに答えた。

「坊主もモテないって事は無いんだがな……女性ファンも何人かい

るんだが、何だかんだでコイツ奥手だからな「

え！？」

「おい、女性ファンって……初耳だぞそんなの」

いや本当にマジで。

「は？ 知らなかつたのかよ！？ お前闘技場の女性客に結構人気なんだぞ」

「何いいい！？ 本當かよスバル、俺も知らなかつたぜ」

「どーいう事かじつくり教えろや、レオテメエ！！」

なんでフカヒレとカニまで反応するんだ？ つーか、俺も全然知らないから。

「お前この前の試合の後、女の客に花貰つてたろ」

「は？ アレそういう意味なのか？」

「知らなかつた……。

「成る程、奥手に加えて鈍感か、コレなら彼女が出来るのに時間が掛かるというものだ」

乙女さんは乙女さんでなんか納得しちやつてるし。その傍らでフカヒレは血の涙を流し、カニは不機嫌オーラを醸し出していた。

「しかし、お前たちは何だかんだで仲が良くていいな……明日の放課後、ちょっと連れて行きたい所があるんだが、教室で待つてくれないか？」

「どこスか？」

興味深々な様子でフカヒレが訊ねる。

「それは行つてのお楽しみだ」

何か微妙に気になるな。

…………… ひつしてそれなりに楽しい歓迎会は終わった。

「所で、伊達は何故あんなに料理が得意なんだ？」

家事の役割分担の話の途中でふと思いついたのだろうか、乙女さんが聞いてきた。

「嫌な家庭の事情だよ、母親が家出てるし、父親とも仲が悪いからそれを聞いて乙女さんは何か言いたげな顔になるが俺はそれより先に話を続ける。

「俺達みたいにまともな親が居る人間には完全には理解できないけど、世の中どうしようもない親ついているから、中学の時の先輩にもそういう人いたし……そういう人の心の傷つてさ、乙女さんや俺が考えてるよりずっと深刻なんだよ」

「だが……いや、やめよういくら親しい人間でもそいつの家庭環境に口を出す権利は無いしな」

確かに……。こればっかりは当事者で解決しなきやいけない問題だ。

## 歓迎会（後書き）

現在の対馬家におけるヒトカラルキー

乙女（一応年功序列で）レオ スバル>>>冷蔵庫>>>力二>  
>>ボディーソープ>>>>越えられない壁>>>>>断崖絶壁>  
>>>>>カヒレ

番外編です。

今回は格闘ゲーム『龍虎の拳』のキャラが1名登場します。

## レオSIDE

懐かしい夢を見た。約1年前のあの日々の夢を……。

誰にだつて挫折する事や壁にぶち当たる事は多い。  
それを乗り越えることが出来るか否かは、その人間の実力もあるが、  
壁の大きさにもよる。

俺がぶち当たつた壁は……余りにもでかかつた……。

俺が地下闘技場へ出入りし始めて3ヶ月……元々空手で鍛えていた事もあり、俺は3ヶ月と言うスピードでチャンピオンへの挑戦権を得た。

しかし……その闘いで俺が得たものは、無様な敗北だった。  
それもそのはず、この地下闘技場に登録されている闘士ファイターの実力はピッソからキリ。

しかしその中でもチャンピオンクラスの実力は余りにも大きすぎるのだ。

AからEにランク付けするとすれば当時の俺の実力はB。  
コレだけ聞けばあと一歩なんて思われるかもしだれないがそれは違う。  
それぞれのランクの強さを説明すれば。

- E 街のチンピラ
- D 格闘経験者（下級）
- C 格闘経験者（中級）
- B 格闘経験者（上級）

## A 超人（乙女さんと同じぐらい）

俺は痛感した。所詮自分はスポーツレベルの格闘技で遊んでいるだけの甘つたるい人間だという事を……。  
このままBランクしょぱいフアイトマネーで小金を稼ぐだけで終わってしまうのか……それも仕方ないのかと思ったのも事実だ……だけどそれ以上に勝ちたかった。

テンションなんかに身を流すのは馬鹿のする事だつてのは解つて、だけどそれでも勝ちたい。

コレがただのトラブルなら波風立てずに終わつたつて良い、だが勝負事だけは話は別だ！！

そんな時だつた、フカヒレの奴がある一枚のチラシを持つてやつてきたのは……。

「コレ見ろよ、『元海軍大佐による格闘訓練合宿、米海軍・自衛隊の基地で開催！！軍人、民間人問わず参加者募集！！』だつてさ、コレで一気に魅力アップだぜ！」

……元海軍大佐、面白い話だと思つた。

その大佐とやらがどれほどのものか分からぬ。だけど強くなれる可能性が少しあるならそれに懸ける。

俺とフカヒレはコレまで溜めていた貯金を断腸の思いで下ろし、夏休みを返上する覚悟で基地へと向かつた。

NO SIDE

合宿にはかなりの人数が集まつた。

レオとフカヒレ以外の民間人はもとより、軍所属の軍人も日米関係無く集まつている。

「スゲエ人数だな……」

「ああ、よくこれだけ集まつたもんだ……お、来たぜ」  
プロペラの回転音とエンジンの爆音と共にヘリが着陸し、中から一人の男が現れる。

緑色のノースリーブの軍服を纏い、オールバツクにまとめた金髪に彫りの深い顔つきをした男だ。

「お、おいアレって……『青い疾風』じゃないか?」「誰かがそう言つたのを聞いてレオは目を見開く。

現在は退役しているがかつてアメリカ海軍に所属していたエースでその戦闘力は常人を遥かに超えていると聞く。

「フツ、随分と暇人が集まつたもんじゃねえか……俺がお前達の教官を務めるジョン・クローリーだ」

その名を聞いた誰もが驚きと確信の表情を浮かべる。

そう、彼こそが『青い疾風』の異名を取る歴戦の勇士、ジョン・クローリーなのだ。

「長つたらしい説明は趣味じゃないんでな、早速訓練を始める、ただ言つておくが無理だと思つたり訓練についていけないと感じた奴はさつさと失せてもらつて構わん、地獄の訓練で構わんと言う奴だけ残りな」

その言葉に動いたものは一人としていない。

いや、フカヒレだけは少し迷つてゐるようだが……。

「全員参加だな、良い度胸だ……それじゃ、お前等全員コレを着る」ジョンが取り出した物は黒いシャツだった。

何がなんだか分からないと言つた様子で参加者達は次々とその服を受け取るが……。

「ぬおお!! 重てつ!!」

「当たり前だ、ソイツは訓練用の錘<sup>おもて</sup>入りのシャツだからな、つべこべ言つてねえでさつさと着ろ!!」

ジョンの一喝に参加者達は次々とシャツを着ていく。

「よし、それじゃ全員、この基地の周囲を兎跳びで一周しろ」「ゲエエツ!! む、無茶な!!」

フカヒレを始めとした軟弱な連中は即座に弱音を吐く。

基地の周囲は数キロの距離がある。フカヒレのような体力の無い人間に出来るようなものじやない。

「無理だつたら帰れ、邪魔になるだけだ」

当然そんな軟弱な意見など一蹴され、参加者達は次々に兎跳びを開始する。

30分後

「俺もうダメ……帰る」

脱落者第1号、フカヒレこと鮫氷新一。

そしてフカヒレの脱落を境に次々と脱落していく参加者達。余談だが1日目にして半數近くが脱落した。

そんな中レオは只管兎跳びを続けていた。

レオは確信していた。この訓練をクリアすれば自分は強くなれると……。根拠などどうでもいい、しかし今日出会ったあの教官からはそれを信じることが出来るほどの強さを感じる、ただそれだけだ。（それだけで十分……）

この合宿は大当たりだ……レオは心の中でそう呟いた。

こつして、レオの地獄とも言える特訓は始まったのである。

レオSHIDE

2ヶ月間に及ぶこの合宿は、文字通り地獄だつた。  
訓練方法は様々だつたがいくつか例を挙げるとすると……。

## その1 超高速ベルトコンベアマラソン

文字通り超高速で動くベルトコンベアの上を走る。足が追いつかなければ後ろに設置してある電流が流れる壁に激突して強烈な電気ショックを喰らってしまう。

「ぬおおおおおおおお……！」

死に物狂いで走る。後ろから「ギヤアア……！」なんて悲鳴が聞こえてくる度に必死になつてしまつ。

「もつと速く走れ！ゴールにぶつ殺したい奴がいると思えば楽なんだろうが……！」

一番ぶつ殺してえのはアンタだよクソ教官が……！

## その2 地獄懸垂

体に通常の2倍の錘を付けての懸垂。

規定回数をクリア出来なければ熱湯風呂ヘダイビング。

「197、198……！」

「……コレきつ過ぎる……」

「熱いいつ……！」

また一人落ちた……うわ、田茶苦茶熱そつ……。

落ちるのはもつと嫌だ……

## その3 教官との組み手

訓練直後のズタボロの状態で教官と組み手である。

「メガスマッシュ！？」

「グギヤアアア！……！」

「フン、口ほどにも無い」

教官の突き出された両手から光の塊が飛び出し、俺をぶつ飛ばした。  
つていうか氣つて本当に飛ばせるんだな……。

「だがああ、俺にメガスマッシュを使わせた事だけは褒めてやる」「お、押忍……」

と、まあ……こんな感じで訓練は続いていく。

しかし人間のなれというものは凄まじく、合宿終盤にはいつの間にかこの地獄そのものと言える訓練も普通にこなせるようになつた。

ちなみに……合宿に最後まで残っているのは俺一人だけだったりする。

そして合宿最終日……今日は卒業試験として教官から圧迫されるる課題をこなさなければならない。

その課題とは……熊とのタイマンだ。

「……む、無茶苦茶だ、技なんて碌に教えてもらつてないのに……」

そう、俺が今回の訓練でやつてきた事は全て肉体改造、技なんて氣のコントロールとそれによつて使用可能な遠当て（飛び道具）『メガスマッシュ』しか教えてもらつてない。

教官曰く「技なんて氣の利いた物は自分で覚えろ」との事だ。

「よーし、始め!!」

俺の意思など無視して教官が空砲を鳴らし、熊が俺に襲い掛かつてくる。

「や、やるしかないのか……」

襲い掛かつてくる熊公に俺は身構えた。

レオと熊のタイマンが始まり数十分、遂に決着の時が来た。

「か……勝つた……？」

軍配が上がったのレオだった。

レオ自身驚いている。死にたくない一心で熊と闘い、熊の持つパワーに怯みながらも、レオはその攻撃の殆どを見切り、最後は自らの腕で熊を投げ飛ばしてしまったのだ。

「ま、マジで強くなつた…………のか？俺は…………」

驚きを隠せ無いレオ、しかしやがて徐々にではあるが心中を喜びの感情が満たしていく。

「は、ハハ……や、やつた……俺は…………」

「！？」

突然何者かの声がレオの喜びの声を搔き消し、それと同時に何かがレオに襲い掛かってきた。

## レオのSIDE

それは一瞬だった、突然教官が襲い掛かってきたのを認識した俺の体は瞬時に反応し、教官の顔面に裏拳を繰り出していた。

そしてそれを怯む事無く教官は顔面で受け止め、その衝撃で教官のサングラスは吹き飛んだ。そして直立不動のまま笑みを浮かべ、一言こう言つた。

「よし、合格だ！」

「え？ 合格つて……？」

「お前は今の不意打ちに反応する事が出来た、戦場じゃ不意打ちな

んざ日常茶飯事、そしてお前はそれに対処できる力と熊をも倒す屈強な肉体を手に入れた、十分及第点だ

……つまり俺は、今度こそ完全に合格したって事か！！

「対馬レオ、よく俺の訓練に最後まで付き合つた、ココまでやる事が出来るとは思わなかつたぜ」

「押忍！ ありがとうございました…」

「ではたつた今を以つて全訓練を終了する…」

教官の宣言と共に遂に俺はこの地獄の訓練を終えたのだった。

## NO SIDE

そして、翌日

滑走路ではジョンがヘリに乗り込もうとしている。

「対馬！」

そういうでジョンはある物を投げ渡した。それは彼が先日まで着けていたサングラスだ。

「貴様が俺を殴ったときに吹っ飛んだサングラスだ、俺は傷物は好みのでな、餞別代りに貴様にくれてやる」

それだけ言ってジョンはヘリに乗り込み、そして最後に一言いつ言った。

「次に会つ時は敵同士だ、それまでに俺と互角ぐらいにはなつておきな！」

その言葉にレオは無言のまま敬礼で返す。

レオにとつては敬礼など自分の柄じゃないが、いつする事が最大の礼儀だとレオは感じていた。

そして離陸するヘリの中でのジョンも笑みを浮かべながら敬礼をしたのであつた。

そしてこれから約3ヵ月後、対馬レオは地下闘技場においてDリーグ  
ル級チャンピオンとして君臨する事となり、そして現在に至るので  
ある。

どうだったでしょうか?  
ツッ「三所は多いかもしませんがご都合主義といふことで」勘弁  
を（笑）

## 生徒会入会

### レオSIDE

えへ、昨日から従姉との同居を始めた対馬レオです。

現在朝食なんですが……メニューはおにぎり（形は歪）、乙女さんの手料理。

つていうか、乙女さんはコレしか作れないのだ。まあ、これはコレで美味しいけど……。

「晩飯、俺が作るよ……」

「ん？ 料理できるのか？」

「一応、肉じゃがや玉子焼きぐらいはね、後は炒め物とか……手の込んだ料理はスバルに任せていたから」

「そ、そっか……（に、肉じゃがに玉子焼き……どれも私が失敗してきた料理じゃないか）……い、一応私も時間があれば作ろう、お前だけに任せきりは不公平だからな」

……料理のレパートリーを増やした方が良さそうだ。

### NO SIDE

そして放課後、昨日の言葉通りレオ達は乙女に連れられてある場所へ向かっていた。

竜鳴館に数多くある道場を通り過ぎ、着いた場所は……。

「もしかして連れて行きたい場所って、学食？」

口火を切ったのはカニだ。

「ああ、そこで待ち合わせしているのはそこ隣の主だがな」

「それって竜宮の事？」

竜宮とは生徒会執行部の独立した木造建物の事である。

代々の生徒会長（女性）がそこで生徒会の運営を行っているのでその名が付いた。

つまり、待ち合わせしている人物とは……。

「乙女センパイ、こつちこつち」

「あれ？ もしかして？」

予想通り、生徒会長霧夜エリカとその親友佐藤良美である。

「ああ、私はこの4人を生徒会メンバーに推薦する」

「は？」

突然予想もしてなかつた事を言われ、レオは軽く混乱する。

「う～ん……ま、いいんじゃない」

姫、あっさり承諾。

「コレどうじうこと？」

「聞いての通りだ、お前達を生徒会執行部のメンバーに推薦した

「なんでした？」

「つむ、つまりだ……」

端折つて説明するとこんな感じだ。

現在の生徒会執行部メンバーは3人。

霧夜エリカ（生徒会長）

鉄乙女（副会長兼風紀委員）

佐藤良美（書記）

以上三名。要するに人手不足である。

「他にメンバー居なかつたつけ？」

フカヒレが珍しく至極真つ当な質問をした。

「目障りなんでクビにしちやつた」

なんともまあ、傍若無人な理由である。

「問題なんて無いわよ、私の決めた事は絶対だし」

「傍若無人な理由パート2（ またかよ！ ）。

「それでも姫は人望はあるからな、面接には何人も来る……だが、能力は悪くないはずなのに片っ端から落としていく」

呆れ半分で乙女が補足した。

「気に入れば取るわよ、気に入らないだけ」

「傍若無人な理由パート3（ もういいっちゅうねん！ ）。

「じゃあ何でオレ達四人合格なんだ？」

レオ達の疑問をスバルが代表して訊ねる。

「そこら辺は貴方達を推薦した乙女センパイから聞いてみたら」

「そう言われて視線は乙女の方へ移る。

「陸上部の伊達は別として、基本的に暇そうだったからな、レオも闘技場に通つてるらしいが、どうせ夜までは暇だろ？」「なんか嫌な理由である。

「あはは、暇人だつて、バカ丸出しー」

力二は自分もそれに含まれていることに気付かず笑い飛ばす。

「だが大きな理由は違うぞ、お前たちは何だかんだで普段罵り合いながらも信頼し合っている、欲しいのはチームワークだからな」「だ、そうよ……私の方は面白そうつてのが一番の理由かな？」

「安直な理由だね……」

最早呆れて物も言えないレオ。

「でも重要な事でしょ？」

「佐藤も異論は無いか？」

「はい、4人増えれば助かります」

良美が優しい笑顔を見せ、なんとなくレオはそれに癒された。

「4人の了解は取つてなかつたわね、どうする、手伝う？」

レオは少し考える、レオとしては夜まで暇なのは間違いないし生徒会に入るのは別に問題ない。

それに美人揃いの生徒会に入ると言つのも悪い話じやない。

（あれ？断る理由無いじゃん）

あつさり結論が出てしまうレオであった。

「俺は別に構わないけど、スバル達は？」

「俺、陸上部に所属してるんだが」

「そこいら辺は考慮するわ、要は頭数だから、まあ少しは仕事してもうらうけどね」

スバルもほぼ問題なし。さて、他は……。

「うーん、かつたるそー」

さすがは蟹沢きぬ、予想通りダメ人間的な答えである。

「ふーむ、私がOK出したのに断られるのも癪だし…………良いわ、竜宮（職場環境）を見てから決めてもうつから」

そう言って姫は立ち上がり、竜宮へと足を向ける。

「私は道場に顔を出してから行く、さつき覗いてみたら部員達め、気合が入ってなかつた」

鬼の居ぬ間に何とやら……拳法部員の連中にレオは心の中で合掌した。

## レオSIDE

執行部の建物、『竜宮』は2階建て、1階はハツキリ言つて物置同然だった。イベントなどで使われる備品が積み上げられていた。しかし2階はといふと……。

「はい、『ココが職場』

「なにい、ほんとど一軒家じやん！」

カニの言つ通り1階とはエライ違いだつた。

机や椅子は勿論台所やソファ、パソコンから「コーヒー」に茶菓子まで完備されている。

その上漫画や雑誌まで置いてある、文字通り好き放題だ。

「成る程ね、姫が時々授業サボる時つて」

「ええ、口で寝てるわ、先生も来ないしね」「そりや美味しいな、俺も使っていいのか？」

おいおいスバルよ、お前はいくら部活補正があるとはいえサボれるような余裕は無いぞ。

「結論は出たか？」

あ、そんな話してると乙女さんが戻ってきた。

「乙女センパイが來たし、丁度良いわね、対馬君はさつきOKだつて言つたし、他の3人も結論を聞かせてくれない？」

「はっ！答えは当然出ているんだぜ！最初からな！（こんな美人揃いの執行部聞いたことが無いね、絶対入る）」

あ～あ、邪念だらけな考えが丸分かりだぜ、フカヒレさんよ。

「ボクもやるよ、条件が気に入つたからね」

カニは物に釣られた典型だな。

「そんじゃ、どこまで力になれるか微妙なモンだが、オレもやってみるかな」

「コレで全員参加か。」

「コレでまとまつたな」

「一気に4人か、景氣良いわね、それじゃお茶会でもやりますか、

よっぴー、お茶」

と、まあこんな感じで俺達は生徒会執行部に入会した。

## 生徒会入会（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0890y/>

---

つよきす 愛羅武勇伝

2011年11月21日18時56分発行